



Title	マインラート・イングリーンの小説『ある民族の青春』における建国伝説とリアリズム
Author(s)	田村, 久男
Citation	明治大学教養論集, 507: 107-126
URL	http://hdl.handle.net/10291/18096
Rights	
Issue Date	2015-03-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

マインラート・イングリーンの小説 『ある民族の青春』における 建国伝説とリアリズム

田 村 久 男

スイスの作家マインラート・イングリーン (Meinrad Inglin, 1893-1971) の小説『ある民族の青春』(Jugend eines Volkes. Fünf Erzählungen, 1933)¹⁾は、長編小説『インゴルダウの世界』(1922年発表)がその自伝的性格のために故郷シュヴィーツでスキャンダルとなった後、同じく実家や親族をモデルにした小説『グランドホテル・エクセシオール』が出版された直後の1928年に書き始められた。この作品では、先に発表した二つの長編小説と同じく生まれ故郷シュヴィーツを主な舞台にしながらも、題材は一転して遠い過去の歴史に求め、スイスの誕生から建国に至る国家の起源伝説をそのモチーフに選んだ。

『ある民族の青春』はスイスの国家創生期の歴史を題材に、それぞれ独立した五つの物語から構成される。第一章「起源」(Ursprung)は、スイスの黎明期を扱い、民族大移動時代にアレマン族の部族長スウィットによるシュヴィーツの地の発見と定住を描く。第二章「邪悪な力」(Unholde Mächte)ではシルトという暴力的な怪物を持って生まれた「怪物」との戦いという形でこの部族に与えられた試練が、また、第三章「世界の浄福」(Das Heil der Welt)はキリスト教の伝播と普及が村の娘イータの受難の物語を通して語られる。続く第四章「使命」(Die Sendung)はスイスの建国伝説を扱い、ハプスブルクの圧政に対する原初三州(ウーリ, シュヴィーツ, ウンターヴァ

ルデン)の住民の抵抗と解放の歴史が、そして第五章「決戦」(Die Schlacht)では、1315年のスイス独立を決定づけたモルガルテンの戦いが描かれる。

イングリー自身、1948年に「改作について」というエッセイの中でこの作品に触れ、「当時私をこの作品の執筆へと動かしたのは、先の小説〔＝スキャンダルとなった『インゴルダウの世界』のこと〕を書き上げた後、写実主義にうんざりし、現実の社会問題や市民的な生活様式に嫌気がさして、新たに未知の分野で自由な創作を始めるために、ひとまず現在から逃げ出したいという欲求だった」(GW 10, 54)と述べている。しかしこの作品も、特に最初の三つの章は、国の始まりから怪物や奇跡なども登場する伝説世界を扱っているものの、その描き方は作者が得意とするリアリズム技法で貫かれる。二十世紀の読者にも納得できるよう、登場人物の性格や動機付けにこだわり、当時の時代状況や歴史的な背景を踏まえながら、伝説や伝承世界にできる限りのリアリティをもたせようとしている。第五章は完全な史実の世界となり、国土に侵攻する敵を迎え撃つべく防備を固める民衆たちの姿が、仲間同士の対立や錯誤なども織り込み、実際にそうあったであろうと思わせるほどリアルに描かれる。作品全体は神話から歴史へ、メルヘン的な伝説世界から史実に裏付けられた現実世界への推移が描れるが、その中で、ヴィルヘルム・テル(ウィリアム・テル)の物語と結びつき、伝説と史実が相半ばするスイスの「建国伝説」を描いた第四章「使命」は、モチーフの点でも橋渡しの位置を占めている。

スイスの建国物語は、ドイツの詩人フリードリヒ・シラーの戯曲『ヴィルヘルム・テル』によって広く知られている。弩の名人ヴィルヘルム・テルを主人公に、オーストリア・ハプスブルク家の専政と代官の横暴に反発しハプスブルクの支配からの解放を求める民衆の物語を舞台化し、1804年のワイマールでの初演から大評判を博した。この原作をもとにしたロッシーニのオペラ「ウィリアム・テル」(1828年)の成功もこの物語の人気に拍車をかけた。シラーの戯曲『ヴィルヘルム・テル』は古典的傑作であるがゆえにスイ

ス建国伝説のいわば決定版ともなっており、作者シラーもこの作品によってスイスの国民的詩人の位置を占めることにもなった。

イングリーンの小説『ある民族の青春』の第四章「使命」で扱われる世界はまさにシラーの『ヴィルヘルム・テル』そのものであり、本論では、ドイツ古典主義時代のシラーによって定番化されたスイスの建国伝説を、二十世紀の作家イングリーンのように描こうとしているかを、技法におけるリアリズムという観点から検討したい。

スイス建国伝説とシラーの『ヴィルヘルム・テル』

スイスの文学研究者フリッツ・ミュラー＝グッゲンビュールによれば、シラーの作品の影響は圧倒的で、1804年の初演から20世紀に入るまでスイスでは100年以上にわたってテルを題材にしたオリジナルな作品は一つも生まれなかったという²⁾。19世紀にはベルンでJ.ゴットヘルフ、チューリッヒでG.ケラーとC.F.マイヤーという三人の大作家を輩出するにもかかわらず、いずれもヴィルヘルム・テル伝説を真正面から扱った作品は存在しない。愛国者であったケラーにとってヴィルヘルム・テルとスイス建国伝説は格好の題材であり、また歴史小説家でもあったマイヤーはルネッサンス期のヨーロッパを舞台にした作品を好んで書いているにもかかわらず、あえてこのモチーフに関わらなかったのは、ともにシラーの作品への敬意と、比較されることを恐れたからだと思像できる。

フリードリヒ・シラーはよく知られているように、その生涯でスイスを訪れたことは一度もなく、親友ゲーテから構想や材料を譲り受け、主としてスイスの歴史家エギディウス・チューディ (Aegidius Tschudi, 1505-72) の『ヘルヴェティア年代記』とヨハネス・フォン・ミュラー (Johannes von Müller, 1752-1809) の『スイス盟約者団の歴史』等の文献史料だけから『ヴィルヘルム・テル』を書き上げた。

テル（あるいはタル）の名前が現れる最も古い史料は、オブヴァルデン州の書記であったハンス・シュリーバー（Hans Schriber 生没年不詳）によって1470年頃に書かれた年代記『ザルネン白書』（Weisses Buch von Sarnen）で、チューディもミュラーもこの年代記を参照している。これらの史書が伝えるヴィルヘルム・テルの物語は次のとおりである。—ハプスブルクの代官ゲスラーはオーストリアの権威を誇示するために棒竿の上に国王の帽子を掲げ、通行する民衆にこの帽子に敬礼をするよう命令を出す。ある日、息子とともにここを通りかかったテルは、帽子への敬礼を行わなかったことを見咎められ、代官ゲスラーの前に引き出される。テルが弩の名手であることを知ったゲスラーは、罪を問わない代わりにテルに、子供の頭の上においたリングを射抜くよう命令し、テルは見事にこれに成功する。しかし手に残った二本目の矢の目的を執拗に問われ、もし失敗していたら二本目の矢で代官を射殺すつもりであったと正直に答えたために再び捕縛され、ゲスラーの居城のあるキュスナッハトへと連行される。途上、フィアヴァルトシュテッテ湖上で一行の載った舟は嵐に遭遇して難破しかけ、代官は、操舵が巧みなテルに舵手を代わるように命ずる。縄を解かれたテルはすきを見て岸に飛び移ってそのまま逃亡し、帰城する代官一行を待ちふせ、ゲスラーを射殺する。

現在では歴史家の間では常識となっているが、スイスの建国と結びついたヴィルヘルム・テルの物語は伝説であり、テルという人物の存在はほぼ完全に否定されている。もともとは1200年代初頭にデンマークの僧サクソ・グラマティクスによって書かれた『デンマーク人の事績』（Gesta Danorum）からの借用であると考えられ、デンマークの物語では、トコという名前の射手が暴君ハラルド王の命令で、自分の子供頭の上においたリングを弓矢で射抜くことを強いられる。リングの的の射撃だけでなく、失敗した際に用意した二本目の矢の目的や、最後には暴君に復讐を遂げるなど、細部においてもヴィルヘルム・テルの物語と極めて似通っており、このトコの伝説は様々に

変形した形でヨーロッパ諸国に広く存在し、これが何らかの形でスイスに伝わり建国伝説と結びついたものであるという³⁾。18世紀の半ばには既にスイスでもイザーク・イーゼリンらの啓蒙主義者によってデンマーク伝説との関連は指摘されており、1760年に、ベルンの牧師ウリエル・フロイデンベルガーの手になる『ヴィルヘルム・テル、デンマークの物語』(Wilhelm Tell. Ein dänisches Mährgen)をフランス語で翻訳出版したゴットリーブ・エマヌエル・フォン・ハラールは当時のベルン政府から叱責を受けている。現代スイスの歴史家ジャン＝フランソワ・ベルジエによれば、既にこれに先立つ二百年も前にバーゼルの人文主義者ハインリヒ・パンタレオンが『ドイツ国民の實在した英雄たち』(Der Teutschen Nation warhafften Helden, ドイツ語版 1567-69年)で、デンマークのトコとスイスのテルを並べて紹介しており、これによって両者のつながりが暗示されているという⁴⁾。

もともと全く別個の物語であったせいもあり、のちに付け加わることになったテルの物語と本来の建国伝説との結びつきはゆるい。シラーの戯曲でも、テルには冒頭で、妻を守るために好色なヴォルフエンシーセンの代官を殺害し、追っ手から逃げるコンラート・バウムガルテンを助けるという役割が与えられているものの(第一幕第一場)、それ以外ではスイスの解放を目指す盟約者たちとはほとんど交渉はなく、テル自身は独立独歩の人物として設定され、テルの物語と民衆蜂起の二つのモチーフはそれぞれ別々に進行する。

シラーが自作の拠り所とした歴史家チューディとミュラーの記述でも、三州の代表者たちが人里離れたリュトリの野原に集まり、互いに協力を約し、期日を決めて一斉にハプスブルクの居城を襲撃してスイスから代官を追放することを決めた、いわゆる「リュトリの誓い」と呼ばれる出来事の後に、テルのエピソードが挿入されている。どちらの歴史書にもここで初めてテルの名前が現れるため唐突な感じさえ受け、ともにテル自身も盟約者の一員で、ミュラーは盟約の主導者の一人ヴァルター・フルストの娘婿であったとするものの、その後の展開では二度とテルの名前はでてこない。テルの物語は

単独の孤立したエピソードにとどまり、ハプスブルクからの解放という歴史的事件そのものとはほとんど関わりを持っていないようにさえ感じられる。

チューディ、ミュラーともテルのエピソード自体はほぼ同じであるが、一連の彼の行動に対する評価は対照的である。チューディでは、テルによる代官の挑発と殺害が、すでに三州の代表により一斉蜂起の期日が翌年の新年（クリスマス）と決定され、そのために密かに準備していた城の襲撃計画を危うくする身勝手な行為と批判されている。リュトリでの計画決定の後、「オットマルの祭日を終えた日曜日、11月18日のことだが、ヴィルヘルム・テルという名の実直で信仰心の篤いウーリの住民が（この男もまた密かに盟約者たちの同志だった）何度かアルトドルフへ行くために掲げた帽子の前を通ったが、国代官のグリースラー〔＝ゲスラー〕が命じた敬礼は一度もしなかった」⁹⁾と始まり、一般に知られている子供の頭の上のリングを射るエピソードと捕縛、逃亡、そしてその後の代官殺害の様子が詳しく紹介される。テルがゲスラーを射殺した経緯を知った同志たちは、彼に同情はするものの、しかし約束に反した身勝手な行為であったと非難する。

しかし同志たちが快く思わなかったのは、合意された一斉襲撃の期日までは、たとえ不合理な命令であっても帽子についての国代官の指示にはテルも従うべきであったのに、彼がそうしなかったことだ。それというのも同志たちには取り決めの日時の前に勝手に仕掛けてはならないという義務があった。皆で相談することなしに、約束した期日の前には単独攻撃はしないと三国の同志の間で互いに固く誓い合っていたのである。もしこれが破られたなら、他の州も期日を早めて攻撃を仕掛けることになり、それによって同志たち全員に迷惑がかかるのは明らかだったからだ⁹⁾。

このチューディの記述では、テルが引き起こした事件のせいで、盟約者た

ちは再びリュトリの地に集まり、決行の時期を早めるべきかどうかを検討するが、結局は準備の時間が足りないために当初の取り決め通りとし、あらためて隠忍自重すべきこと、そして再度、約束の日まで決して攻撃を仕掛けてはならないことが確認される。

チューディが、テルの代官殺害を約束を破る身勝手な行為であったと批判している一方、ミュラーの方は、愛国心によるやむにやまれる行動であり、むしろ民衆を勇気づけたと積極的に評価する。ミュラーは仲間たちの批判には一切触れずに、「ヘルマン・ゲスラーがこのような最期を遂げたのは、国土の解放のために取り決めがなされた日より前のことであった。抑圧された民衆はこの殺害には全く関与せず、ただ自由を求めるひとりの男の当然の怒りから起こったのである。祖先から受け継がれた祖国の自由が制限され、嘲笑され、圧迫されることが、とりわけこの時代の逞しい若者の燃える心にどれだけ耐え難いものであったかを考えるなら、この行為を不当とみなすものは誰一人としていないであろう。〔…〕ヴィルヘルム・テルの行動はごく普通の男たちにも勇気を与えた」⁷⁾と述べ、さらには自由を求めて抑圧と戦った古代アテネやローマ、聖書の中のヘブライ人の偉業を引き合いに出して暴君殺害を弁護し、テルの行為は英雄的なものであったと賞賛している。

シラーの『ヴィルヘルム・テル』では、事件の事実関係はチューディやミュラーをそのまま踏襲し、評価についてはミュラー同様、テルは代官殺害によって自由を求める民衆を勇気づけた英雄として描かれる。シラーの場合は、主人公のテルをあえてリュトリの盟約に加わらせず、これによって、そこで合意された自重の義務を免れさせている。しかしテルの予定外の行動が、結果的であれ、民衆たちによって密かに準備されていた一斉襲撃の計画に不都合をもたらす危険な行為であったことには変わりない。シラー自身も弁護の必要を感じていたようで、叔父の国王アルブレヒトを殺害した甥ヨハン・パリチーダをテルと対峙させるという架空の場面をあえて最終幕に挿入し、そこでテル自身に自分の代官殺しを正当化させている（第五幕第二場）。この場

面は議論が抽象的にすぎるせいも現在の上演でもカットされることが多いが、すでに初演当時から批判もあり、劇場俳優イフランドの削除すべきとの意見に対して、シラー自身は、「パリチーダの場面は作品全体の要です。テルの代官殺しはこの場面があるからこそ倫理的にも創作的にも救済されるのです」⁸⁾と述べている。

ハプスブルクの圧政と代官の横暴

史書が伝えるスイスの建国と独立は、スイスを本拠とする地方貴族のハプスブルク家出身の神聖ローマ皇帝ルドルフ一世が1291年に死去し、皇帝位が新たにナッサウ家のアドルフに移ったところから始まる。歴代の皇帝から帝国直属都市の勅許状を得ていたウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデンの三つの地域の住民は、新皇帝アドルフ側についてそのまま自治権を認めてもらおうとするが、アドルフと皇位を争って敗れたハプスブルク家のアルブレヒトは代官を通じてスイス支配を強め、新たにウーリの地に「ウーリの軛」(ツヴィング・ウーリ)と名付けられた新しい城を建築する。このようなハプスブルクの支配強化が住民たちの反発を高めたのである。

『ザルネン白書』以来、チューディやミュラーの歴史書でも、ハプスブルクの代官たちの横暴を示す三つ事件が重なり、これがハプスブルクからの解放を目的とした盟約者団結成へとつながったとしている。第一の事件はウンターヴァルデンの農夫コンラート・バウムガルテンによる代官殺しである。コンラートの不在中に彼の家を訪れた好色な代官ヴォルフエンシーセンは、家にいたコンラートの妻に湯浴みのために風呂を沸かすよう命じ、一緒に入るよう強要する。妻の機転で知らせを受け、急ぎ近くの山から戻った夫コンラートは、湯浴み中のヴォルフエンシーセンを斧で殺害する⁹⁾。二つ目もウンターヴァルデン州メルヒタールに住む農夫に起こった事件で、ランデンベルクの代官の家臣が、農夫一家の所有する二頭の立派な雄牛を奪い去ろうと

する。息子アルノルトは牛を守ろうと抗う際に、持っていた棒で代官の家臣の指を打ち折って逃亡する。逃げた息子の代わりにランデンベルク城に連行された老父は、代官の拷問により両眼を灼熱した鉄の棒で突き刺され盲目にされてしまう。アルノルトはウーリに逃れ代官の横暴を訴える。そして三つ目の出来事が、シュヴィーツの裕福な農民ヴェルナー・シュタウファッハーの石造りの邸宅にまつわる話である。国代官のヘルマン・ゲスラーは、土地の有力者であったシュタウファッハーを訪れた際、新築の豪華な家屋敷を見とがめ、許可なく勝手に石造りの屋敷を建てることは御法度であり、全ては国王に属する旨を申し渡す。ゲスラーの言葉を脅しととったシュタウファッハーは不安を覚え、妻の助言に従ってウーリのヴァルター・フルストのもとを訪ね善後策を相談する¹⁰⁾。

シラーの戯曲『ヴィルヘルム・テル』でも、これら三つの事件はほぼ忠実に盛り込まれ、ハプスブルクの代官の横暴と民衆が蜂起を決断するまでの過程を全五幕中の最初の幕にまとめ、続く第二幕の「リュトリの誓い」の場で大きなクライマックスをつくり、第三幕以降のテルの物語につなげている。シラーの作品は、テルの故郷ウーリを主な舞台としているため、他の土地で起こった代官の横暴に関わる事件は登場人物の台詞を通して紹介される。代官ヴォルフエンシーセン殺害の話は、冒頭で追っ手から逃げるコンラート・バウムガルテン自身により（第一幕第一場）、ヴェルナー・シュタウファッハーの新築の家屋敷に関する話は、シュタウファッハーの妻ゲルトルトの口を通して（第一幕第二場）、そして雄牛略奪のエピソードと父親が代わりに盲目にされたメルヒタールのアルノルトの話は、ウーリで身を寄せるヴァルター・フルストと彼を訪れたヴェルナー・シュタウファッハーとの対話の中で報告される（第一幕第四場）。

事件の当事者であるウンターヴァルデンに住むメルヒタールのアルノルトとシュヴィーツのヴェルナー・シュタウファッハー、そして彼らが頼るウーリのヴァルター・フルストの三人はハプスブルクへの反抗を決意し、彼ら

三人が主導者となり、それぞれ自分の土地で同志を集めて、リュトリの野原で会合することを約す（第一幕第四場）。リュトリの会合では、期日を決め、三国が一斉に城を襲撃してハプスブルクの代官を追放することを互いに誓約する（「リュトリの誓い」）。そして第三幕で再びテルが登場し、リンゴの的を弩で射るエピソードから代官殺害（第四幕第三場）に至るまでの一連の有名な場面が展開するのである。

イングリーンにおける歴史伝承とリアリズム

イングリーンは『ある民族の青春』を書き終えた1930年、バーゼルの「国民新聞」のアンケートに答え、作品に関連して次のように述べている。

私がかねてより、ヨハネス・フォン・ミュラーのスイス史の他に、この偉大なる素材を包括する叙事的な物語がないのを寂しく思っていました。私自身がこれを書かねばならないという考えは結局最後まで離れず、必要な場面は自ずと集まってきました。本来、このような素材が長く読み継がれるためには韻文叙事詩の形がふさわしかったのですが、私は緊張感に満ちた散文で書くことにしました。私は自分が持っている力のすべてを使って書き上げました。祖国解放の伝承自体は、外見的には『ザルネン白書』が伝える最古の物語と同じです。これについては勝手気ままに実験めいたことはできませんし、実際そんなことはやっていません。しかし伝承を、それ自体が本来もっていた光のもとに照らし出すことは可能なのです¹¹⁾。

イングリーンはスイスの建国伝説を、伝統的なエピソードはほとんどすべて盛り込みながら「文学作品」として描き直そうとした。恣意的な変更はしていないとしながらも、描写に説得力をもたせるため、実際にはかなり大幅

な改変を加えている。

民衆蜂起のきっかけとなったハプスブルクの代官の暴虐を表す三つのエピソードには、一つ一つはそれ自体では民衆の正当な反抗の動機として弱さも指摘される。シラー『ヴィルヘルム・テル』では、その戯曲構成の巧みさと場面の省略が効果的に使われているため、個々の動機の弱さはそれほど目立たず、次々にエピソードを重ねていくことでハプスブルクの圧政を強調し、一斉蜂起までの過程に十分な説得力を持たせることに成功している。しかし、コンラート・バウムガルテンと好色な代官の例では、理由はともかく結果的に殺害されたのは代官の方であり¹²⁾、メルヒタールのアルノルト場合も、老父に対してなされた残虐な刑罰は、もともとはアルノルトが犯した違反行為の「罰」¹³⁾として、牛を接収しようとする代官の家臣を傷つけて逃亡したことへの報復の意味合いも強い。シュタウファッハーの石造りの家屋敷のエピソードにいたっては、代官ゲスラーの言葉は脅し文句でしかなく、現実の不利益は存在しない。シュタウファッハーがこの言葉に将来の不安と脅威を抱いただけなのである。

イングリーンはこれらの動機の弱さを補うために、新たにアルトの娘ゲマをめぐる悲劇を作品の重要なモチーフとしてつけ加え、一斉蜂起への直接的な原因としている。――民衆の不穏な動きを察し、ハプスブルク家によって新しくスイスに派遣された代官ゲスラーは各地の城代に支配を強化するように指令を出す。ラウエルツ湖上の小島に立つシュヴァーナウ城の城代は支配強化にかこつけ、かねてより想いを寄せていた娘ゲマを「城女中」として強引に自分の城に連れ帰る。ゲマにはすでに許婚があり、城代の邪な欲望を知ったゲマは、一度は逃亡を試みるが、すぐに発見され城に連れ戻される。絶望した彼女は最後には城の窓から湖に身を投げる。

このゲマの物語は、シュヴァーナウ城をめぐる民間伝承の一つであり、城が焼き打ちされた原因として伝えられているものであるが、チューディやミュラーなど正統な歴史書には見られない¹⁴⁾。

ゲマの誘拐直後、シュヴィーツの指導者的地位であるアマン（在郷郡長）で、ハプスブルクには公然と反旗を翻すことにためらいを感じずシュタウファッハーは、城に乗り込もうといきり立つゲマの兄ヴァルターと許婚リュトフリートに、「犠牲を我慢して待つのだ。お前たちも後悔することはない。雷雲が集まる前に雲から稲光が一つしたとして、何になるのだ。シュヴァーナウの代官にはわしが話をしてみよう」（104）と言って一旦はなだめることに成功するものの、ゲマの死の知らせが届くともはや二人を押しとどめることはできない。

ゲマの許婚リュトフリートと彼女の兄ヴァルターが武具を身につけ、平静は装っているものの深刻な面持ちでやってきたのを見て、シュタウファッハーは驚いた。「我々は助っ人を集めにシュヴィーツに行く」とリュトフリートは手短かに言った。「誰も見つからなければウーリに行く。今度こそきつとシュヴァーナウの代官の息の根を止め、城を焼き払う。これをあなたに言いに来ただけだ。もう忠告は必要ないし、待つつもりはない。お達者で！」（120）

ゲマの誘拐から墜落死までの間に、メルヒタールの逃亡事件とその後の父親の盲目刑の知らせ、そして代官を殺害したコンラート・バウムガルテンのエピソードが報告される。ともに内容に大きな変更はなく、それ自体はゲマとは無関係に起こった独立した出来事であるが、より悲劇的なゲマの事件の間でハプスブルクの代官たちの横暴を強調し補完する意味合いが強くなっている。

シュタウファッハーのエピソードは、ゲマ事件を引き継ぐ形で展開する。ゲマの兄と許嫁の決意を聞き、各地の主だった者達と連絡を取り合いながら、なおも事態を収集しようと努力するシュタウファッハーのもとを、民衆の不穏な空気を感じたゲスラーが警告のために訪れる。「アマンよ、恥ずかしく

ないのか。民衆がいたるところで常軌を逸して騒ぎ立てているのに、お主はまるで手綱をまだしっかり握っているかのような顔をして安穩と座っている」(122)と、あくまでも民衆をハプスブルクに服従させるよう求めるゲスラーと、自由の権利を主張するシュタウファッハーとの間の論争は折り合いがつかず、ゲスラーは立ち去る際にシュタウファッハーの家屋敷を見て、「ハプスブルクの支配下では農民が勝手に石垣を造ってその上に家を建てるのを禁じている。わしはこの地で国王の代理であり、わしの了解なくこのようなことをするのを決して許しはしない」(123)と申し渡す。ゲスラーのこの言葉自体はチューディやミュラーをほぼそのまま踏襲しており、シラーの戯曲中の文言もほとんど同じである。しかしこれらの先行作品では、代官ゲスラーがはじめからシュタウファッハーの贅沢な家屋敷そのもの問題にしているのに対して、イングリーンでは、自由をめぐる両者の言い争いの末、談判が決裂した後、いわば捨ゼリフとして付け加えられており、このゲスラーの脅し文句によって初めてシュタウファッハーにハプスブルクに対する反発心が生まれたわけではない。

イングリーンのテル像

イングリーンの徹底したリアリズム描写はヴィルヘルム・テルの人物像にも見られる。神話的な英雄に見られがちな超自然的な不合理さは排除され、生身の人間としてあり得る姿に描き直される。先行する史料はテルがどのような人物であったのか全く伝えていないが、イングリーンはテルの過去の経歴を次のように紹介している。

ティートガー [=テルの本名] という男は洗礼を受けておらず、腕力に優れた猟師で、山から降りてきてウーリの谷に小さな家を建てた。[…]
この猟師は羊を飼って平和に暮らしていた。しかしその後、修道院の寺

男が、彼の土地から教会税を取りたてるために何度も無駄足を踏んだ後、最後は修道院を庇護する代官の命令を受け、武装した家来を引き連れてやってきたので、ティートガーはこの寺男を撃ち殺した。地元の裁判所は死罪に値すると思ったが、わざとよそに逃してやった。彼は妻メヒトヒルトと息子とともに数匹の山羊を連れて、狩猟道具を持って湖畔の森の中に逃げこんだ。ゼーリスベルク川に沿った崖の上の森を開墾し、大きくて丈夫な舟を作り、三年の後には彼は森林湖の渡守りになっていた。(95)

歴史家チューディとミュラーの記述ではテルは突如として現れ、代官を殺害した後は、続く一斉蜂起でも再びその名前が現れることはない。すでに触れたように、テルのエピソードが元々は別の物語で後からスイスの建国伝説に入り込んだためと考えられているが、イングリーンは彼を、人を殺めたお尋ね者にする事で世間から隔絶された人物に設定した。さらに、テルはリング射撃で示されるように弩の名手であるとともに、湖上で嵐にあった際、唯一荒波を切り抜けることができる巧みな舵取りでもあったとされるが、この一見不自然な設定をイングリーンは、テルに猟師と渡守りという二つの経歴をもたせることで正当化している。そもそも「テル」(愚か者)というスイスでは奇妙な名前も、追手を逃れるためにつけた変名(99)であり、またテルが森で隠れ住むために開墾した土地がリュトリとなっている。

テルの開墾地リュトリが盟約者たちの集会の場所となるのは、彼の妻のメヒトヒルトの希望である。作品の冒頭、湖畔のブルネンでの集会在ハプスブルクの代官によって解散に追い込まれた事件を目の当たりにしたメヒトヒルトは憂国の情にかられて、秘密会合に相応しい場所に、自分たちの住む開墾地を使うように自ら申し出る。

湖畔にたたずんでいたのは渡し守ティートガーの妻メヒトヒルトだった。

彼女はそれまでも往來でウーリの人々から故国の苦しみをもういやというほど耳にしていたが、今、彼女自身も異国の兵士が馬で駆けまわり、高慢な代官が冷酷な表情で、岸辺に集まった祖国の代表者たちを容赦なく蹴散らすのを見て、心の中で強大な武力を持った敵に激しい嫌悪を感じた。(94)

メヒトヒルトはウーリのアマン、ブルクハルト・シュプファーを訪ね、人里離れたリュトリを集会の場所に使うよう提案し、その後もリュトリが人目を忍ぶ会合の場所として使われるようになる。

ゲスラーの殺害と「リュトリの誓い」

建国伝説では、ウーリ州に属しながら、ウンターヴァルデンの州境にも近く、シュヴィーツ州ブルネンの港の対岸に位置するリュトリの地は特別な意味を持っている。ハプスブルクの専政に苦しむ三国の代表者たちが、密かにここリュトリの野原で集まり、三国の民が一致団結してハプスブルクに反抗し、その支配から脱することを厳かに誓い合う。「リュトリの誓い」は建国伝説の核心であり、盟約が結ばれたとされるリュトリの地は、現在のスイス連邦 Schweizerische Eidgenossenschaft (字義通りには「スイス盟約者団」)が誕生した神聖な場所とされている。ウーリとシュヴィーツ、ウンターヴァルデンの指導者ヴァルター・フェルスト、ヴェルナー・シュタウファッハー、そしてメルヒタールのアルノルトの三人がこのリュトリの野原で仲間たちとともに誓いをたてる場面はシラーの『ヴィルヘルム・テル』のクライマックスの一つとして描かれ、厳かに誓い合う三人の姿は現在ベルンの連邦議会の彫像を始め多くの絵画のモチーフになっている。しかしイングリーンの作品では確かにこの三人が誓いを立てる場面はあるものの、これが行われるのはリュトリの野ではなくウーリの在郷貴族アッティングハウゼンの屋敷内であ

る。非業の死を遂げたゲマの兄と許嫁が決起を決意した後、暴走を阻止するためにアッティングハウゼンを訪れたシュタウファッハーが、三国が団結すべきことを二人に提案し同盟に合意する。

シュタウファッハーとメルヒタールのアルノルト、ヴァルター・フルストは互いに左の手を取り合い右手を高く掲げて誓いをたてた。「全能の神とすべての聖者たちにかけて我々は誓おう。神の名にかけて、アーメン。」

誓約によって離れがたく結びついた三人の男たちは、協議のために薄暗い小部屋に入った。三人の誓約者は、それぞれ自分の土地で密かに同志を募ること、同志たちからは誓約をとり、この同盟に忠誠を尽くし誓いの内容は命をかけて守らせること、しかし古い秩序は守り、真の皇帝と帝国には義務を果たすことで合意した。三つの国すべてで十分な同志が集まるか、または緊急事態が発生した際に、三人の誓約者は故郷の主だった同志を連れてリュトリに集まり、いつどのように同盟を公にして実力行使に出るか、相談することに決めた。(127f.)

この三人の合意の直後にテルの事件が起こる。つまり、イングリーンのこの作品では、一般に「リュトリの誓い」と呼ばれている盟約者たちの会合は、テルがゲスラーを殺害した後に開かれる。先に見たように、チューディとミュラーの歴史書の記述に従ったシラーでは、「リュトリの誓い」が——たとえテル自身はこの集会に参加していなかったとしても——前に置かれているために、テルの代官殺しは結果として、密かに準備されていた同志たちの蜂起計画を妨げたという批判も避けられなかった。チューディでは実際に計画の変更も討議されているのである。イングリーンはこの問題を両者の順番を入れ替えることによって解決した。これによってテルによるゲスラーの殺害は批判から免れ、模範的な英雄行為となり、民衆を勇気づけ、ハプスブ

ルクに対する一斉蜂起を後押しする役割をもたせることができた。

テルの姿で具現し、テルによって実行された生まれ持った本性が、谷々にすむ民衆の心にも目覚めた。心ならずも信仰心や罪を犯すことへの不安、良心のとがめを感じ卑屈になっていた民衆の中に生来の不撓不屈の勇気が沸き起こった。どうしてもやらなければならないことなら、テルのように素直にそのまま実行すれば良いと、人々も思うようになった。〔…〕最初に誓い合った三人の同志は月明かりの夜、信頼できる故郷の仲間たちを連れて一斉蜂起の相談をするためにリュトリの野原にやってきた。〔…〕彼らは言い争うことはなく、キリスト教の名のもと抑圧者たちにクリスマスまではこの世の平和を楽しむことを許し、それまで各々の場所で時を有効に使い、準備を整え、状況を互いに知らせ合うことで意見が一致した。(136f.)

ここにはもはや誓いはなく、伝統的に「リュトリの誓い」とよばれる神聖な場面ではなくなってしまう。たしかにテルは救国の英雄となり、身勝手であるという負の評価から守られたものの、しかし、建国伝説の肝というべき、リュトリの野原での厳かな誓約の場面が消滅することになったのである。

おわりに

イングリーンはこの作品で神話・伝説とされる物語をリアリズムによって合理化しようとした。代官の横暴と民衆蜂起の必然性をゲマの悲劇によって補い、リュトリの野が秘密の集会の場所になった経緯を説明し、テル自身も過去を持った生身の人間として描こうとした。そしてテルによる代官ゲスラーの殺害もその身勝手さから救うために事件の前後関係を改めた。しかしその

結果、建国伝説の最も重要な場面が失われることになった。これは伝説の「脱神話」化ということもできるであろう。しかしこの「脱神話」は後にマックス・フリッシュが『学校のためのヴィルヘルム・テル』(Wilhelm Tell für die Schule, 1970)でドラスチックに行ったような意図的なものではなく¹⁵⁾、神話に徹底したリアリズムを追求したための必然的な結果なのである。スイスの建国伝説と結びついたヴィルヘルム・テルの物語はあまりにも有名で、個々のエピソードも定番化されており、作者自身も「国民新聞」のアンケートで答えていたように恣意的な変更は難しい。すでに読者の間に定着したイメージを守りながら、しかも合理的で説得力を持った文学作品に仕上げるために多くの変更を加えているが、中にはつじつま合わせに終始し、そこには説明的にすぎる描写さえも見て取れる。

『ある民族の青春』の第四章「使命」の後半では、各地のハプスブルクの城への民衆たちによる一斉攻撃が描かれ、続く第五章「決戦」では、鎮圧のためにスイスに侵攻するハプスブルクの大軍を三州の合同軍がモルガルテンで迎え撃って潰走させた歴史的な大勝利が語られる。代官の居城へ攻撃は、シラーの『ヴィルヘルム・テル』では登場人物によってその成功が簡単に報告されるだけであるが(第五幕第一場)、イングリーンでは三国における城攻めの様子がそれぞれ詳しく、しかも生き活きと描かれ、メルヒタールのアルノルトがランデンベルクの代官に執拗に復讐する描写はサディシチックでさえあり、作者自身これを楽しんでいるかのような印象さえ受ける。「決戦」でもモルガルテンでの迎撃戦を前に、防御を固めて強大な敵を待ち受ける三国の民衆たちの緊張感がドラマチックに描かれる。モルガルテンの戦い自体は史実であるが、結果以外の具体的な経緯は殆ど確認されておらず、「記録熱心でなかった先祖たちは不思議なことにモルガルテンでの偉大な勝利について一言も書き残してはおらず、そのため、後の子孫たちに自由に物語ることのできる可能性を残してくれたように思われる」(「改作について」GW 10, 55)と作者自身が述べているように、細部については大部分がイングリー

ンの想像による創作である。自由な創作の余地があるが故に描写にも広がり
と躍動感が感じられる。

マインラート・イングリーンはこの作品を仕上げた翌年の1931年、長編
小説『スイス年鑑』(Schweizerspiegel)の執筆にとりかかる。時代は再び
「現在」に戻り、第一次世界大戦中、国境警備にあたったスイス軍兵士たち
の様子や、大戦末期の社会不安の中で労働者による大規模ストライキに至る
経緯が描かれ、イングリーンの最高傑作の一つとされている。敵の侵攻に備
える召集兵たちの緊迫した雰囲気や暴動と化した労働者ストライキには「決
戦」の描写と相通じるものがあり、その意味でスイスの伝説を素材にした
『ある民族の青春』も社会文学的性格を強く持つ『スイス年鑑』へのひとつ
の橋渡しと位置づけることが出来るであろう。

《注》

- 1) 引用は Meinrad Inglin: Gesammelte Werke in 10 Bänden, hrsg. von Georg Schoeck, Zürich 1989 より, „Jugend eines Volkes“ Bd. 3 は本文中に括弧内にページ数を, その他の作品の引用は GW で巻数を付け加えた。
- 2) Fritz Müller-Guggenbühl: Die Gestalt Wilhelm Tells in der modernen schweizerischen Dichtung, Abhandlung zur Erlangung der Doktorwürde der philosophischen Fakultät I der Universität Zürich, Arau 1950, S. 17. ゴットヘルフは『テルの子供』(Der Knabe des Tell, 1832) という子供向けの作品を書いている。
- 3) テル伝説の成立については Jean-François Bergier: Wilhelm Tell — Realität und Mythos. Aus dem Französischen von Josef Winiger, Zürich 2012, S. 61ff. および, 宮下啓三著『ウィリアム・テル伝説 ある英雄の虚実』日本放送出版会 1979年, を参照した。
- 4) Bergier, S. 426.
- 5) Aegidius Tschudi: Chronicon Helveticum, 3. Teil, bearbeitet von Bernhard Stettler, (Quellen zur schweizer Geschichte, 1. Abt. Chroniken Bd. VII/3) Bern 1980, S. 230.
- 6) A.a.O., S. 233.
- 7) Johannes von Müller: Der Geschichten Schweizerischer Eidgenossenschaft, 1. Teil, Leipzig 1786, S. 613f.

- 8) Hans Ulrich Lindken: Erläuterungen zu Friedrich Schiller, Wilhelm Tell (Königs Erläuterungen und Materialien, Bd.1), Hollfeld 1994, S. 56 より引用。
- 9) ヴォルフエンシーセンはシラーでも「代官」(Burgvogt) とされているが、ベルジエは「代官」ではなくハプスブルクに従う在郷貴族の一人であろうと推定している。Bergier, S. 26. イングリーンもこの作品では単に貴族 (Junker) としている。
- 10) Tschudi, S. 213, 217, 221.
- 11) „Umfrage bei Schweizer Dichtern“ In: <National-Zeitung>, Sonntagsbeilage, Nr. 20, Basel 18. 5. 1930. Beatrice von Matt: Meinrad Inglin. Eine Biographie, Zürich 1976, S. 154 より引用。
- 12) マックス・フリッシュは『学校のためのヴィルヘルム・テル』の本文に付した注釈で、疲れた旅の途中でこの農家に湯浴みを求めただけではないのかと、ヴォルフエンシーセンの代官の振る舞いを弁護しようとしている。メルヒタール, シュタウファッハーの場合も同様にむしろ抑圧された側の落ち度を指摘している。Max Frisch: Gesammelte Werke in zeitlicher Folge 1931-1985, Bd. VI, hrsg von Hans Mayer, Frankfurt am Main 1998, S. 422f., 423f., 430. („Wilhelm Tell für die Schule“, Anmerkungen 19, 22, 28)
- 13) Tschudi, S. 217.
- 14) 19世紀前半のスイスの作家トーマス・ボルンハウザー (1799-1856) にこの伝承を扱った『アルトのゲマ』という戯曲がある。Thomas Bornhauser: Gemma von Art. Ein Trauerspiel, Trogen 1829. またシュヴィーツ州アインジーデルンに生まれた郷土作家マインラート・リーネルトが1914年に子供向けに書いた『スイスの伝説と英雄物語』ではハプスブルクの代官の横暴さの例としてゲマの事件が挙げられている。Meirad Lienert: Schweizer Sagen und Heldengeschichten, 3. Aufl., Ulm 2012, S. 49. イングリーンがこの作品を執筆するために参照した1832年出版のT. ファスビントの『シュヴィーツ州の歴史』にはシュヴァーナウの城代の好色の記述はあるものの、ゲマの名前は出てこない。「この城代はところかまわず往来や民家で美しい娘たちを強奪し、自分の島の岩城に連れて行き、純潔や貞節などおかまいなしに、娘らを陵辱したのである。」Thomas Faßbind: Geschichte des Kantons Schwyz, Bd. 1, Schwyz 1832, S. 141.
- 15) 白崎嘉昭訳『学校版ウィリアム・テル』(白崎嘉昭・新本史斉『現代スイス文学三人集 — ヴァルザー・ブルクハルト・フリッシュ』行路社 1998年) 参照。

(たむら・ひさお 政治経済学部教授)